

久しぶりのパリだ。子どものワークショップを開くために来た。日仏四〇人の小中学生が携帯電話を使って四コマ写真マンガを作ろうというものだ。街や人の写真をケータイで撮って四コマのストーリーをたくさん作る。東京の子どもたちが作った作品をパリに送る。パリの子は、その写真だけをみて別のストーリーを作ったり、ストーリーに合った写真を撮ったりする。自分たちの作品も作る。それをみて東京の子は同じ作業をする。

東京でもパリでも、はじめて遊ぶケータイに夢中になる。普通のカメラに比べ、接写が多いのはインタフェースの違いによるものだろうか。町へ出て、グイグイとケータイを押しつけて写真を撮りまくる。放っておくと、着信メロディやテレビ電話機能を見つけて遊び始める。機械の説明は不要だ。

ストーリーには差が出る。パリっ子は、かわいい童話を描いたり、素直でまとまりのある風景描写をしたりする。東京の子どもたちは、起承転結にメリハリをつけようとしたり、ギャグに走ったりする。芸術の国とマンガの国の違いだろうか。

日本が世界的に先行するケータイの技術と、長く育んできたマンガ表現とを組み合わせる。ニッポンの技術や表現を使って、新しい国際コミュニケーションを拓く。今回は第一弾の取り組みで、より活動を広げていくようユネスコからも期待されている。

そのユネスコが主催する会議のため、昨年、香港を訪れた。そこで出会った地元女性、二〇代独身・高層アパート住まいが言う。「日本の人はみな一軒家に住んでるからうらやましいです。」私は一軒家に住んだことはなく、アパートばかりである。いったい誰が一軒家に住んでいるというの？「ドラえもん。」「ちびまるこちゃん。」「クレヨンしんちゃん。」「アラレちゃん。」なるほど。アニメで香港に紹介されるニッポン代表はみな一軒家なのだ。彼女は日本の首相の名は知らない。メディアを通じて知っているのはキャラクターばかりであり、それが日本の顔なのだ。

これも去年、ケータイ国際フォーラムというイベントの司会で天津に出向いた際、「天津飯を食いたい」と現地の方にせがんでみた。だがみなきょんとしている。調べてみると、天津飯というのは日本で生まれた料理で、むかし卵を中国から輸入していたころの積出港である天津の名前を冠したのだそうだ。香港女性が日本の虚像を描いていたように、日本は天津に勝手なイメージを抱いている。

むかし、「ミネソタの卵売り」という歌があった。ミネソタ出身のラジオ局の社長に会ったとき、ミネソタの卵売りはどんな格好をしているのか私がしつこく質問し、ミネソタには卵売りなどいないとする社長と言い争いになった。冷静になって考えれば、それも日本の勝手なミネソタ観であった。

情報がどうという実像を描くのかは、情報の受け手側に委ねるしかない。デジタル・メディアの発達は、グローバルなズレを埋めるのだろうか。世界はもっと分かり合うのだろうか。

2001年九月十一日。その日の早朝、私はクルマでボストンからニューヨークに向かっていた。マンハッタンに入る橋で、警官に「ここから先には進めない、引き返せ」と告げられ事件を知った。三〇分早ければ、テロの現場あたりにいたことになる。

それからカーラジオで状況を聞きながらボストンに戻り、テレビで画面を見た。覚悟をして見たのだが、それでも衝撃は大きかった。アメリカは時間帯からしてリアルタイムに映像を見た人はそう多くない。日本の方がリアルタイム性が高く、ショックが強かったかもしれない。

衛星やファイバーで世界は一つ。つながって分かり合えば平和になる。そんな根拠のない説教はもう誰も信じない。むしろつながった方が争いは増すのかもしれない。戦争や競争といった国家や企業の争いが二〇世紀の原動力であったとすれば、二十一世紀の原動力は何か。

百年前のポーア戦争以来、戦争は映像と不可分だった。二次にわたる世界大戦は映画の戦争であり、ベトナムはテレビであり、フォークランドは衛星であり、湾岸はリアルタイムのシミュレーションだった。テロ後のアフガンは、インターネットが国境を薄めてから初の戦争だ。そして二〇〇三年のイラクへと続く。

イラクはブロードバンド後初の戦争だ。開戦前、地球規模で反戦運動が広がった。ネットの威力である。デジタル技術が世界を結んだ。しかし、デジタル技術は殺人兵器でもあった。宇宙から数センチの精度で映像解析された地点にピンポイントで爆弾が投下された。地上戦ではウェアラブルコンピューターで武装した兵士が効果的な殺戮を遂行していた。同じ技術が戦争を抑止し、戦争を推進する。技術がどちらに進化していくかは、使う側の態度で決まる。

かつて情報ハイウェイと呼ばれたインターネットは、この数年で、道路から広場に変身した。人々がアイデアや情報を持ち寄って、共有して交換して、新しい価値を生む場となった。テレビ局の報道が大勢のブログで糾弾されたり、匿名の投稿サイトが有名雑誌を超える力を示したりしている。特に若い世代がデジタルの力を先んじて吸収している。

渋谷の街頭のオヤコビ族。片手の親指でメールを連発するケータイの先端ユーザだ。ハワード・ラインゴールド著「スマートモブズ」は、そんなニッポンのティーンエージャーに出会った驚きから始まる。でもそれはもう5年前の姿だ。古ぼけて映る。顔を黒く塗り、ケータイにはカラフルな飾りをジャラジャラぶらさげて渋谷をウヨウヨしていたガングロたちは姿を消し、小学生が目立つようになった。親指で送るものは、文字のメールに、写真メール・ビデオメールが加わった。

ビデオとケータイが組み合わせたり、テレビ局の中継車並みの機能を手中にする。一億人の歩くテレビ局ができあがる。ニッポンの若者が世界に先駆けて実践することになるのかもしれない。

彼女たちは文字のメールも打つ。だがその字は、鍛錬なくして読めない。彼女たちのケータイ文字は手作りだからだ。ギャル文字という新型文字だ。若いやつは活字離れで、などというが決して文字離れではない。振り返れば平安の女性は、かな文字を開発した。日本のアナログ文化を築いた。当時の世界文明をリードした。千年たって、平成の女性は、ギャル文字を開発する。日本のデジタル文化を築く。そして現代の世界文明をリードしている。とまで言うのはほめすぎだろうか。

綿矢りさ、金原ひとみ両氏のように、若い女性が文学賞を取るケースが目立つ。匿名サイトでのやりとりが恋愛小説と化した「電車男」のように、会ったこともない人たちがネット上で新しい文学表現を作り上げたりする。デジタル世代の表現が文学とネット文壇を突き抜ける。文字離れどころか、書くことが苦痛でない世代の登場と見るむきもある。

「映像がなくても大興奮してしまいました。」アテネ・オリンピックで、野口みずきさんが優勝した際、高橋尚子さんが発したコメントだ。高橋さんはその時コロラドにいてテレビが見られなかったから、日本のテレビの音声を電話で聞いていたという。

その気持ちはわかる。その四年前に私は同じことをしていたからだ。シドニー・オリンピックの際、私はボストンにいた。アメリカは五輪を NBC がみな録画中継したため、高橋尚子さんのレースをリアルタイムに見られなかった。くやしい私は日本の親類に電話をかけ、テレビの前に受話器を置いてもらい、実況中継を国際電話でむさぼり聞いた。

その国際電話、一時間以上聞いていたのだが、衛星のせいなのか海底ケーブルのせいなのか交換機のせいなのか、音声がとぎれとぎれに聞こえた。私はそのとき学んだのである。人間、大切なことを、とぎれとぎれに聞くと、とても興奮するということを。

一九三六年、レニ・リーフェンシュタールが美しく撮った民族の祭典、ベルリン・オリンピック、女子二〇〇m 平泳ぎで、前畑秀子選手が日本人女性初の金メダルを取った。私の祖父母の代は、NHK 河西三省アナウンサーが「前畑がんばれがんばれ前畑」と絶叫した中継を鉱石ラジオでむさぼり聞いたという。とぎれとぎれだったという。興奮したであろう。七〇年たって、デジタルで、ブロードバンドでというのだが、技術と人の間のリアリティーは進化していないようだ。

最近の映像圧縮技術を用いれば、七〇年間ビデオを撮り続けるとデータ容量が一〇テラバイトに収まる。ハードディスクに詰め込めば、今の製品価格で一〇〇万円ぐらいだ。生まれたての赤ん坊の頭にビデオカメラをくっつけて、見るモノ一生みんな録画しても一〇〇万円。その価格は急速に下がる。それを全部ネットでつないでみよう。新しいバーチャル空間ができあがる。そうすれば何が起きるだろう。空想でできているだろうか。しかもそれは、もう市販製品のできる話なのだ。

十五世紀の活版印刷により、人は書を読むようになり、考え、疑問を抱き、追求し、三世紀、四世紀のうちに近代科学や資本主義を生んでいった。ゲーテンベルクはそれを見通していただろうか。デジタル技術を手にするわれわれは、三世紀後に何がもたらされるか空想しようとしているだろうか。